めざす授業像に向けた実践報告

外国語活動部　　寺　内　　健

１　授業像設定の理由

外国語活動では、「コミュニケーション能力の素地」を育成することをめざしている。「コミュニケーション能力の素地」とは、小学校段階で外国語活動を通して養われる、言語や文化に対する体験的な理解、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度、外国語の音声や基本的な表現への慣れ親しみを指したものである。単元を通じて、相手の言いたいことを注意深く聞いて理解しようとしたり、自分の言いたいことを伝えようとしたりしながら、相手と積極的にコミュニケーションを図ろうとする子どもの姿を目指したいと考えた。そこで、「コミュニケーション能力の素地」の中でも、「積極的にコミュニケーションを図る態度」を養うことに着目し、研究を進めていくこととした。

２　実践事例

本単元は、身近な場所や施設への行き方を尋ねたり伝えたりする表現に慣れ親しみ、道案内をできるようにする学習である。子どもは、道案内をするために必要な表現に慣れ親しみ、学んだ表現を道案内に活用していくであろう。その際、子どもが身近な場所や施設への行き方を尋ねる表現や、案内するための動作や方向を表す表現を何度も聞いたり話したりする活動を大切にしたい。そうすることで、子どもは、案内したい道を選んだり、右や左、真っ直ぐといった動作を表す表現を自在に使ったりして、積極的にコミュニケーションを図ろうとすると考えたからである。

（１）子どもの姿から見られた資質・能力を発揮した場面

本授業でとくに意識して設定した資質・能力は以下のとおりである。

①活用できる知識・技能	②自ら問題を見付ける力・解決する力	③根拠をもとに筋道を立てて考える力	④自分や仲間の考えを問い直す力	⑤様々な角度から自分の考えを創り出す力	⑥自分の思いや考えを分かりやすく伝える力	⑦仲間の考えを受けとめる力	⑧仲間の考えを求める力	⑨自分の学びを見つめ直す力	⑩自分から学びに向かおうとする力	⑪人間性（感性、達成感など）に関すること

自己の発揮の具体

①　町にある施設を英語で何度も言っていたら、上手に言えるようになったよ。

かかわりの具体

⑦　言葉だけではなくて動作もつけて友達に伝えられたよ。

⑦　友達が分かったかどうか、表情を見ながら話すことができたよ。

心の幹の具体

⑨　上手に道案内ができるようになったのは、友達と話したりＡＬＴの先生の発音を真似して言ったりしたからかな。

⑩　今度は外国の人にも道案内をしてみたいな。

上記のような、子どもの姿をめざし、以下の３つの支援を行った。支援を行ったことで変容した子どもの姿を以下に示す。

（１）１つ目の支援

子どもが主体的に学習に取り組める単元構成の工夫

導入において、ＡＬＴと担任とで道案内のやりとりを見せた。ここでは、道案内に必要な表現、

「Where do you want to go?」「Turn right.」「Turn left.」「Go straight.」の表現や、「post office」「city hall」などの町にある施設についての語彙を学習せずに、ＡＬＴとやりとりを見せ、何を言っているのかを推測させた。その際、教師は、作成した大きな地図を貼り、その地図の道なりに指示通りにマグネットを動かしていく。子どもたちは、「担任の先生は旅をしにきた人で、ＡＬＴの先生は道を案内している人だな」「ザビエルに行きたいのだな」「あの道の方が近いのに遠回りしている」「おー、ザビエルに着いた、着いた」などつぶやきながら、教師が言っている英語をなんとか聞き取ろうとしている姿が見られた。子どもは、表現や語彙を学習していなくても、やりとりを見せることで、動作を見たり、教師が行うやりとりの中で聞き取れる語彙を頼りにしたりして、状況や話していることを理解しようとしたのである。

やりとりの内容を聞き取ろうとする子ども

（２）２つ目の支援

意欲的にコミュニケーションを図ることができる活動の工夫

学校周辺の場所や施設を会話の中で使用したり、学校での会話の場面を設定したりした。「Hi,friends2」では、「教会」「コンビニエンスストア」「市役所」「美術館」の語彙は、入っていない。しかし、子どもたちの生活に近い施設を語彙として扱った。本時では、最初は施設を隠して提示をしたので、学校の周りにある施設を想像しながら語彙を学習していった。そうすることで、子どもは、学校の周りにある建物を日本語では言えるのだけれど、英語でなんて言うか分からず、「市役所って英語で何て言うのだろう」「美術館って英語で何て言うのだろう」と、身近な施設を英語で表現することに興味をもつ姿が見られた。このように、子どもたちにとって身近な場面設定をすることで、英語で表現することに興味をもって、積極的に会話することにつながったのである。

子どもにとっての身近な場面設定

（３）３つ目の支援

思いを伝えられる楽しさを感じ、共有できる場の設定

毎時間の振り返りでは、できるようになったことを記述している子どもを見取り、価値づけた。本時の振り返りでは以下のような子どもを見取り、全体に紹介した。

Ｎ児：今日は、道案内について学びました。最初よりも案内の仕方が分かったのでうれしかったです。
Ｕ児：レフト、ライトは分かったんだけど、道案内の仕方とか他の場所をとかを言えるようになりたいです。

Ｎ児は、１時間の学習の中で自己の変容を自覚し、できるようになったことへ喜びを感じている。Ｕ児は、できるようになったこともあるけれど、もっと他の語彙も学びたいと感じている。どちらの子どもも今後の学習へ期待をもっていることが分かる。このような振り返りへの価値付けを繰り返すこ

とで、互いの自己の変容を共有し、外国語への学びに向かう雰囲気を作ることができると考える。

３　今後の課題について

この単元の学習を通して、主体的に活動できた場面はあったが、その後の単元やその後の外国語の学習につながる取組が足りない。外国語活動全体を通じて、やりとりに関する基本的な態度を、継続して学習したいと考えている。例えば、やりとりの際には、聞く姿勢として、あいづち、アイコンタクト、理解を示すために相手の話したことを繰り返すこと、分からなかった場合尋ね返すなどの態度は、年間を通じて学んでいきたい。そのような態度を基盤に、よりあたたかい人間関係を外国語を通じて築いていきたい。